



Title	懷徳堂記念講座講演題目一覧（昭和二十六年～昭和六十年）
Author(s)	
Citation	懷徳. 1985, 54, p. 73-83
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90649
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷徳堂記念講座講演題目一覧

(昭和二十六年～昭和六十年)

(末尾の数字は論文掲載の『懷徳』号数。*は要旨掲載)

第一回 (昭和二十六年五月二十一日～二十六日)

- 漢字文化の過去と現在 木村 英一 22
- アメリカ人の見た孔子 貝塚 茂樹
- 儒教の道徳とその将来 武内 義雄
- 懷徳堂の文芸 神田喜一郎 22
- 大阪を中心として見た儒医 渡辺 幸三
- 杜甫の文学 吉川幸次郎

第二回 (昭和二十六年十月八日～十三日)

- 欧亜大陸北部を通じての古代東西文化の交流 梅原 末治
- 香料の源流 山田憲太郎 23
- 東西交通上の南洋 桑田 六郎 23
- 法生活上より見たる東洋と西洋 谷口 知平
- 天文曆法より見たる東西文化の比較 能田 忠亮 23
- 古代医学の東西 木村 康一

第三回 (昭和二十七年五月二十六日～三十日)

- 老子 木村 英一
- 能楽の詞章としての謡曲 阪倉篤太郎 24
- 日本書紀について 西田直二郎

中庸

蘇東坡の詩について

第四回 (昭和二十七年十月六日～十一日)

- 天平時代の芸術 望月 信成
- 中国の美術 小林太市郎 24
- 雲崗の石仏 長廣 敏雄
- 現代書道の趨勢 辻本 史邑
- 印度・ペルシャの細密画 上野 照夫
- ギリシャの彫刻 村田教之亮

第五回 (昭和二十八年五月二十五日～三十日)

- 詩経 木村 英一
- 老子 武内 義雄
- 近松と日本の演劇 小島 吉雄
- 史記屈原伝 橋川 時雄
- 春秋 重澤 俊郎 26

第六回 (昭和二十八年十月五日～十日)

- 明治の精神と啄木 高坂 正頭
- 明治初期の官僚 坂田 吉雄
- 明治の女性 石田 一良
- 日本経済の発展と外資 堀江 保蔵
- 明治医学の一隅 古武彌四郎 25
- 明治の漢詩壇 神田喜一郎

第七回 (昭和二十九年五月二十四日～二十九日)

- 周易 木村 英一 26
- 楽記 張 源祥

尚書

平岡 武夫

説文(講師病気のため欠講)

石浜純太郎

万葉集

澤瀉 久孝

水経注

森 鹿三

第八回(昭和二十九年十月二十五日~三十日)

アメリカの東洋学

吉川幸次郎

フランス法学界と日本

石本 雅男

インドの見聞―仏跡と宗教事情

藤吉 慈海

トルキスタンの民族

岩村 忍

慶陵の研究

田村 実造

第九回(昭和三十年五月二十三日~二十八日)

三礼

木村 英一

元遺山の史詩

鈴木 虎雄

王維の話

橋本 循

齊民要術と中国の農業

天野元之助

源氏物語

島田 退蔵

中国の辞書類

石浜純太郎

第十回(昭和三十年十月三日~七日)

居庸関の遺址

村田 次郎

文人画について

島田修二郎

蘇東坡とその書

中田勇次郎

丹波立杭黨の歴史と現状

武藤 誠

文楽の今昔

高安 六郎

第十一回(昭和三十一年五月二十一日~二十六日)

孝経

木村 英一

天工開物

荻内 清

論衡

森三樹三郎

憶良文学形成の一断面

高木市之助

元代の演劇

入矢 義高

中国の史書類

石浜純太郎

第十二回(昭和三十一年十月一日~五日)

戦後のイギリス人の生活

大阪谷公雄

印度の旅行

長尾 雅人

欧米美術行脚

井島 勉

アフガニスタンで発見の蒙古語文書

岩村 忍

欧米哲学界の印象

高坂 正顕

第十三回(昭和三十三年五月二〇日~二十五日)

論語

木村 英一

名物雑話

青木 正児

大学と契矩之道

後藤 俊瑞

抱朴子

村上 嘉実

源氏物語の女性美描写について

平林 治徳

敦煌について

石浜純太郎

第十四回(昭和三十三年九月三〇日~十月五日)

新中国の考古学

水野 清一

中共学界訪問

重澤 俊郎

アメリカの裁判所を巡りて

澤 栄三

欧米に於ける東洋学

高橋 盛孝

研究室の窓から―パリでの

久保 秀雄

忘れられぬこと、なつかしい人―フラ

ンスの旅

和田誠三郎

第十五回(昭和三十三年五月二十六日~三十一日)

孟子 木村 英一

荆楚歳時記 守屋美都雄

史記 田中 謙二

殷墟の卜辞について 白川 静

雨月物語 宇佐美喜三八

塩鉄論 西田太一郎

第十六回(昭和三十三年九月二十九日~十月二日)

大阪漢学論 木村 英一

明治初期の大阪を中心とした新聞の発

達

維新前後における産業都市大阪 松浦 直治

大阪文芸史の一節 宮本 又次

第十七回(昭和三十四年五月二十五日~三十日)

兩雅 野間 光辰

万葉集と風土 木村 英一

莊子 犬養 孝

管子 福永 光司

周易 清水 潔

錢謙益の列朝詩集 本田 濟

第十八回(昭和三十四年九月二十八日~十月三日)

ロビンソンとガリバー 吉川幸次郎

テレビによる学習と教育の変革 村上 至孝

難波宮址の発掘と昔のナニワ 田中 正吾

山根徳太郎

インドの仏跡

梶山 雄一

社会学の歴史と儒学

藏内 数太

漢法医学とベルグソンの哲学 澤瀉 久敬

第十九回(昭和三十五年五月二十三日~二十八日)

荀子と経学 木村 英一

中国古代法 内田 智雄

静斎門の論理学 壺井 義正

詩人蘇東坡 倉田淳之助

枕草子 林 和比古

敬について 笠原 仲二

第二十回(昭和三十五年十月十七日~二十二日)

日本仏教と社会 赤松 俊秀

風俗史上より見たる日本中国の交渉 江馬 務

初期の日米関係 時野谷 勝

明治政治史上の二潮流 梅溪 昇

日本神話について 藤 直幹

絵巻について 源 豊宗

第二十一回(昭和三十六年五月二十二日~二十七日)

大学と中庸 木村 英一

五十而知天命 森三樹三郎

詩経 白川 静

平家の歌人 谷山 茂

韓愈の詩文における諧謔について 清水 潔

欧米に於ける教養と古典 扇谷 尚

第二十二回(昭和三十六年十月十六日~二十一日)

中国の音楽と音楽観

張 源祥

喜劇的なものについて

河本 敦夫

戯画の歴史

森 暢

絵巻物の話

梅津 次郎

宋元の絵画

中村 茂夫

漢の画像石

長廣 敏雄

第二十三回(昭和三十七年五月二十一日〜二十六日)

中庸

木村 英一

顔氏家訓

守屋美都雄

漢書

平中 荅次

かなの発生と古典文学

阪倉 篤義

白氏長慶集

高木 正一

老子第八十章―中国のユートピア―

秋田 成明

第二十四回(昭和三十七年十月一日〜六日)

天竺の仏跡を巡りて

今小路覚瑞

慈覚大師の入唐巡礼

小野 勝年

敦煌の再生

藤枝 晃

ウイグル文書探索行―中央アジアから

ロンドンまで

山田 信夫

ヨーロッパ文化と日本文化

豊田 堯

欧米における中国研究

宮崎 市定

第二十五回(昭和三十八年五月二十七日〜六月一日)

白氏文集

平岡 武夫

資治通鑑

外山 軍治

四庫の分類法

鈴木 隆一

張彦遠「法書要録」における六朝の書

論

中田勇次郎

花伝書(風姿花伝)

田中 裕

周礼

重澤 俊郎

第二十六回(昭和三十八年九月三十日〜十月五日)

米欧を巡っての所感―東西の文化と將

来

木村 英一

日本人の評価―アメリカとイギリスの

場合

内多 毅

欧米における外国語教育―極東語を中

心として

伊地智善継

東南アジアの仏教―アジアの光

香港の一年

牧田 諦亮

アメリカの日本研究

論語の郷党篇

清水 茂

陶淵明と現代

周濂溪の通書

梅溪 昇

日本上代の詩

鄂君啓節について

木村 英一

鏡花縁

森格と大阪

一海 知義

第二十七回(昭和三十九年五月二十五日〜三十日)

萩生徂徠

偉人と英雄―フリードリッヒとナポレ

佐藤 震二

小島 憲之

大島 利一

湯浅 幸孫

中山 治一

今中 寛司

オン

積懸遠

ゲーテ

孔子

第二十九回(昭和四十年五月二十四日～二十九日)

経書の成立

明夷待訪録

李義山

自然と人為

食経について

連歌の話

第三十回(昭和四十年十月十一日～十六日)

一遍と目蓮

グリフィスと明治日本

紫式部

古代エジプトの宗教と美術

エジプトとヨーロッパ

五代友厚

第三十一回(昭和四十一年五月二十三日～二十八日)

漢書芸文志

江戸時代の篆刻

韓非子

白氏文集

貝原益軒の養生訓

日本における漢学

豊田 堯

木全 徳雄

田中 健二

木村 英一

木村 英一

西田太一郎

高橋 和巳

森三樹三郎

篠田 統

田中 裕

黒田 俊雄

梅溪 昇

玉上 琢弥

加藤 一朗

村田教之亮

宮本 又次

木村 英一

中田勇次郎

大久保荘太郎

花房 英樹

丸山 博

池上 禎造

第三十二回(昭和四十一年十月十七日～二十二日)

西村天囚先生のこと

内藤湖南先生のこと

狩野君山先生のこと

懐徳堂五十年の歩み

武内誼卿先生のこと

公開座談会「懐徳堂を語る」

第三十三回(昭和四十二年五月二十二日～二十七日)

論語の学而篇

李長吉の詩

芭蕉の一面

茶経

隱遁思想と孔子

伝習録

第三十四回(昭和四十二年十月十六日～二十一日)

大阪の心学

山片蟠桃

大塩中斎

泊園書院について

懐徳堂と麻田剛立

麻田剛立の解剖学

懐徳堂座談会

第三十五回(昭和四十三年五月二十七日～六月二日)

論語に見える子貢

春秋について

後醍醐院良正

宮崎 市定

吉川幸次郎

木村 英一

小川 環樹

木村 英一

荒井 健

大谷 篤蔵

布目 潮風

笠原 仲二

島田 虔次

竹中 靖一

有阪 隆道

岡本 良一

水田 紀久

羽倉 敬尚

小川 鼎三

木村 英一

竹内 照夫

莊子について

野村 茂夫

漢字と文化

平岡 武夫

日本における仏教と古典文芸

小田 良弼

文心雕龍

興膳 宏

第三十六回（昭和四十三年十月二十一日～二十六日）

明治時代の大阪の工業

宮本 又次

明治時代の書における伝統と革新

中田勇次郎

森鷗外の翻訳について―即興詩人から

川口 朗

明治期の民衆教育

駒田 錦一

大阪会議前後

梅溪 昇

懷徳堂座談会

第三十七回（昭和四十四年五月二十六日～三十一日）

論語の一面―孔門の若き秀才たち

木村 英一

藤井竹外

北村 学

杜甫の世界

黒川 洋一

建安文学について

伊藤 正文

黄山谷の詩

倉田淳之助

古典語と現代語

宮地 裕

第三十八回（昭和四十四年十月十三日～十八日）

中国古代の官僚制

大庭 脩

西洋の芸術

山川 鴻三

大阪と朝鮮

岡崎 精郎

企業に於ける人間理解

太城 藤吉

インドからギリシャへ

村主 恵快

懷徳堂公開座談会

第三十九回（昭和四十五年五月十八日～二十三日）

潜夫論について

日原 利国

万葉歌と風土

犬養 孝

山片蟠桃と多田義俊

宮内 徳雄

六朝の政治と文学

森三樹三郎

子路と顔淵

木村 英一

高駢の山亭夏日について

都留 春雄

第四十回（昭和四十五年十月十九日～二十四日）

古代土器にみる美と技術

北野 耕平

古代畿内の帰化人と文化

井上 薫

運慶の芸術

毛利 久

中世宋学の問題点

和島 芳男

江戸時代の家族慣行

平山敏治郎

歌舞伎と操り

時野谷 勝

第四十一回（昭和四十六年五月二十四日～二十九日）

子路の事跡

木村 英一

尺牘の書

外山 軍治

不平の文学

田中 謙二

朱子学について

木南 卓一

西鶴のおもしろき発見

信多 純一

商君書について

清水 潔

第四十二回（昭和四十六年十月四日～九日）

万葉以前

本田 義憲

落窪物語の本について

柿本 奨

説話と「かたり」

阪倉 篤義

能の作者と世阿弥

現代語の話

大阪と難俳

第四十三回 (昭和四十七年五月二十二日～二十七日)

曾子について

経と権―原理と現実

杜甫における詩人としての自覚

儒教における国家と個人

山片蟠桃の「夢の代」

命名と漢字―日本人の文字意識から

第四十四回 (昭和四十七年十月二十三日～二十八日)

日明貿易と大阪府

難波の宮と京

大阪城と大阪

平安朝の渡海僧

近世の大阪商人

南港寧波と寧波商人

第四十五回 (昭和四十八年五月二十一日～二十六日)

新しい中国の文化と古典

呂氏春秋私見

西行と定家

新出富永仲基書翰

焦循の学問

高階春帆について

第四十六回 (昭和四十八年十月二十二日～二十七日)

北川 忠彦

宮地 裕

宮田 正信

木村 英一

森三樹三郎

黒川 洋一

日原 利国

末中 哲夫

池上 禎造

小葉田 淳

沢村 仁

岡本 良一

小野 勝年

宮本 又次

斯波 義信

木村 英一

大久保荘太郎

安田 章生

水田 紀久

坂出 祥伸

北村 学

朝鮮中国からみた古代日本

高松塚古墳その後の問題

中世海外通交史上の大坂

豊臣秀吉と東アジア

岡倉天心と東洋の理想

幕末志士の中国観

第四十七回 (昭和四十九年十月二十一日～二十六日)

近松の時代―伝記を中心として

古浄瑠璃から近松へ

近松当時の人形たち

近松の世話物―晩年の作品を中心とし

て

近松の時代物―国性爺合戦を中心とし

て

近松物と現代

第四十八回 (昭和五十年五月十九日～二十四日)

韻書と反切の系譜

中国の思想革命

袁随園の哲学

聖徳太子と梁の武帝―隠された十字架

以後

中国古代の農事詩

多神教の世界観―中国と日本

第五十回 (昭和五十年十月二十七日～十一月一日)

お茶の歴史

井上 秀雄

井上 薫

三浦 圭一

脇田 修

柴田 實

梅溪 昇

森 修

角田 一郎

信多 純一

横山 正

向井 芳樹

吉永 孝雄

辻本 春彦

木村 英一

本田 濟

梅原 猛

清水 茂

森三樹三郎

布目 潮瀧

ササン朝イラン史跡

本田 實信

陶磁器の東西交流

大庭 脩

地図の東西交流

海野 一隆

長沙馬王堆出土の古佚書について

佐藤 武敏

モンゴル帝国時代の大旅行家

山田 信夫

第五十一回 (昭和五十一年五月二十四日～二十九日)

漢字の文化

平岡 武夫

わが生涯の最良の日々―インド思想と

山口 恵照

仏教の道

児玉 昇

民族主義―ユダヤ人を中心として

増田 清秀

唐人の庶民生活取材の楽府

池田 末利

東洋的寛容

加地 伸行

中国人の孝・日本人の孝

岡本 良一

第五十二回 (昭和五十一年十月十八日～二十三日)

大阪城について

宮本 又郎

大坂蔵屋敷と堂島米市場

矢守 一彦

町絵図から見た大坂

作道洋太郎

豪商の商法と家訓―鴻池と住友の場合

協田 修

産業都市としての大坂

芝 哲夫

倉密局とハラタマ

上山 春平

第五十三回 (昭和五十二年五月二十三日～二十八日)

朱子の礼学

山川 昭一

中国文学の性質―政治性

熊谷 開作

夫婦の氏の歴史

庄司 荘一

詩経について

白楽天の文学

花房 英樹

列子説話考

山口 義男

第五十四回 (昭和五十二年十月三十一日～十一月五日)

古代における人間像の誕生

吉井 巖

伊勢物語の虚構の方法

片桐 洋一

平安末期の物語二種

阪倉 篤義

曾我物語と義経記

福田 晃

夏目漱石の「門」

川口 朗

西鶴「日本永代蔵」瑣々談

村田 穆

第五十五回 (昭和五十三年五月二十二日～二十七日)

荀子の解釈について

竹岡 八雄

祝允明と「罪知録」

間野 潜龍

現代中国の歴史性

竹内 実

唐詩と道心

平野 顕照

中国人の復讐観

日原 利国

密教の世界

松長 有慶

第五十六回 (昭和五十三年十月二十三日～二十八日)

幕末日本人の中国観

日比野丈夫

イスラムの地理思想

高橋 正

宣長と篤胤

子安 宣邦

古代の中国農業

米田賢次郎

中国社会と商業

斯波 義信

唐中期の仏教と國家

礪波 護

第五十七回 (昭和五十四年五月二十一日～二十六日)

善導大師の至誠心

水谷 幸正

明治初年の堺県と小河知事

菅原道真の詩

西村天囚と懷徳堂

中国地図史における近年の発見

「詩経」と歌垣

第五十八回（昭和五十四年十月十五日～二十日）

元祿の社会

自然科学者としての中井履軒の業績

中世の寺院生活

光明皇后願文にみえる天平の明暗

寛政異学の禁と大阪の儒者

批判者の思想―春秋

論語集解をめぐって

論語二章

康有為と「新学偽経考」

晋代の儒者

詩経の興について

第六十回（昭和五十五年十月二十日～二十五日）

大谷探險隊―シルクロードを調査した

最初の日本人

仏教美術の東漸

契沖をめぐる人々

京大坂の地図と景観図

音楽に於ける古典の意味

山中永之佑

菅野 礼行

戸川 芳郎

船越 昭生

吉田 恵

脇田 修

伴 忠康

黒田 俊雄

井上 薫

宮城 公子

日原 利国

田中 利明

尾崎雄二郎

坂出 祥伸

野村 茂夫

西村富美子

ネパール紀行

第六十一回（昭和五十六年五月二十五日～三十日）

日本文化と道教

文学としての「観無量寿経」

和漢薬と健康

孫文と日本

現代中国を知るために

懷徳堂をめぐる科学者たち

第六十二回（昭和五十六年十一月四日～十一日）

明清時代の書院について

懷徳堂の教育と旧中国の教育

北宋士大夫の人間像

産業革命を生きる―工業化初期イギリ

スの家族と生活

宋代の出版文化

第六十三回（昭和五十七年五月二十四日～二十九日）

〈大阪の歴史と人物〉

高山右近の生きた時代

淀屋辰五郎と町人文化

近松と義太夫

多田源氏と石川源氏

難波宮の歴史と天皇

西村天囚と懷徳堂

伴 忠康

福永 光司

黒川 洋一

山村 雄一

山口 一郎

伊地智善継

芝 哲夫

小野 和子

加地 伸行

末中 哲夫

中田勇次郎

川北 稔

笠沙 雅章

脇田 修

今井 修平

信多 純一

黒田 俊雄

長山 泰孝

梅溪 昇

* 51

* 51

* 51

* 51

〈中国の文化と日本〉

「忠臣蔵」のシノロジー

孟子の遊説

ことばの来往

抹茶の起源

漢字の構成

江南の旅

第六十五回(昭和五十八年五月二十三日～二十八日)

〈近世画壇―人と作品〉

狩野探幽

尾形光琳

与謝蕪村

円山応挙

司馬江漢

富岡鉄斎

第六十六回(昭和五十八年十月二十四日～二十九日)

〈上方ことばの世界〉

細雪の言語生活

御所のことばについて

関西ことばの基層―ことばと文化

『日本語地図』からみた上方ことば

上方の地名

表現法の地域差

第六十七回(昭和五十九年五月二十一日～二十六日)

〈日本文化における古典―伊勢物語の場合〉

伊勢物語の本質とその背景

伊勢物語と源氏物語

伊勢物語と絵画

鈴木春信の見立絵―伊勢物語を中心として

伊勢物語と謡曲

伊勢物語と和歌・連歌

第六十八回(昭和五十九年十月二十二日～二十七日)

〈中国の人物像〉

諸葛孔明―政治家として

李白と杜甫―巨星の出会い

蘇東坡―政治と文学

孫文―人と思

海瑞―ある清官の生涯

王安石―財政改革の旗手

第六十九回(昭和六十年五月二十日～二十五日)

〈大阪の町々―歴史の舞台として―〉

上町台地のあけぼの―原始時代の大坂

天王寺と渡辺―中世の大坂

船場

道頓堀

堂島

川口居留地―文明開化の大坂

第七十回(昭和六十年十月二十一日～二十六日)

〈現代芸術の世界〉

片桐 洋一 * 53

伊井 春樹 * 53

伊藤 敏子 * 53

小林 忠 * 53

伊藤 正義 * 53

島津 忠夫 * 53

狩野 直禎 * 53・53

黒川 洋一 * 53

笠沙 雅章 * 53

堀川 哲男 * 53

岩見 宏 * 53

斯波 義信 * 53

和田 實 * 52

堀井令以知 * 52・52

寿岳 章子 * 52

徳川 宗賢 * 52

鏡味 明克 * 52

佐藤 亮一 * 52

都出比呂志 * 54

田中 文英 * 54

宮本 又郎 * 54・54

脇田 修 * 54

本城 正徳 * 54

梅溪 昇 * 54

抽象芸術は何をめざすか

神林 恒道 * 54

新たな自然を求めて—オブジェの問題

岩城 見一 * 54

記号化する現代と芸術

出川 哲朗 * 54

大衆化する芸術のなかで—小説と映画

の場合

源 高根 * 54

ポップ・アート—俗物の芸術

太田 喬夫 * 54

工業化時代の技術と芸術

潮江 宏三 * 54

芸術作品におけるオリジナルとコピー

森谷 宇一 * 54

ビデオ・アートの現在

吉積 健 * 54

演劇からパフォーマンスへ

上倉 庸敬 * 54

現代音楽に何をきくか

畑 道也 * 54

会場 第一回～第二十回 大阪大学医学部第二講堂

第二十一回～第五十九回 大阪大学松下会館小講堂

第六十回～第六十一回 大阪府民文化室会議室

第六十二回～第七十回 大阪府立文化情報センター

(追記) 懐徳堂記念講座は懐徳堂春季講座・同秋季講座と通称され、通算回数に冠して来ませんでした。今回、通して回数を入れました所、近年の本誌彙報等で記した回数は一回多く算入していることがわかりました。ここに訂正いたします。